【多摩丘陵・私の出会った生き物たち 33】　＜タヌキとの５ヶ月＞　　桑原紀子

西緑地のしめ縄作りの朝、山道を下りていたら、前方を黒っぽい動物が横切りました。猫にしては大きい。もしや、と思って山道に続く木立を透かしてみると、やはりタヌキです。下の茂みからこちらを窺っています。

人気のない山道で、私はタヌキ語で呼びかけてみました。
”ヒューン、ヒューン”
タヌキは”アレッ、アイツ、タヌキナノ？”という風情で､じっと私を見ています。しばらく見合っていましたが､（そうだ、しめ縄）と、私は山道を急ぎました。

私は、実は少しだけタヌキ語が話せるのです。

もう１０年以上も昔のことです。まだ能ケ谷に大きな里山があった頃、タヌキの赤ちゃんが道に迷い出て、近くの人に保護されました｡手のひらに乗る位の真っ黒の赤ちゃんタヌキ。見つけた人は熊の赤ちゃんかと思ったそうです。

一晩中鳴いて、困ったその人は市役所に電話しました。その頃仲間とタヌキの調査をしていた私に保護してほしいと依頼がありました。６月の大雨の日でした。赤ちゃんを見て、あまりの小ささに雨の山に置き去りにできず、私は自宅で育てることにしたのです。体重３２０ｇ､”ヒュンヒュン”大きな声で鳴き喚き、部屋をうろうろ歩き回ります。その頃の育児ならぬ育ダヌキ日記を見ると、食べ物、ウンチの世話などに悪戦苦闘しています。

鳴き声からヒュンヒュンと名づけたこの赤ちゃんタヌキは、少しすると、生まれつき目が見えない事がわかりました。パッチリ見開いた目なのですが、あちこちにぶつかったり、目の前に手をかざしても反応しないのです。親に捨てられたのか、自分ではぐれてしまったのか、自然界では淘汰される運命だったのでしょう。

ミルクをスポイトで飲ませたり、顔を振ってパクッと噛み付くのにタイミングを合わせてバナナやパンを食べさせたり、ウンチが出ると胸をなでおろしたり、慣れない育タヌキに一喜一憂です。発育の悪いヒュンヒュンも、背中に白い毛がうっすら生え始め、少し子ダヌキらしくなり、体重も少しずつ増え、呼ぶと、駆け寄ってきて前足で私が出した手を押さえたりするようになりました。ト・ト・ト・ト部屋を走るだけだったのが、子ダヌキらしく少し遊ぶようになったのです。その頃初めてヒョーンという独特の高い声をだすようになりました。

部屋の隅に置いたケージを自由に出入りして、好きな場所で眠り、家中で愛されたヒュンヒュンですが、５ヶ月いっしょに暮らし、１１月の未明に私に抱かれたまま短い生を閉じました。

親代わりにはなれませんでしたが、小さな野生のタヌキと暮らした５ヶ月の間に、私は少しだけヒュンヒュンと話せるようになったのです。